



NPO JCP NEWS

32

2016.12.25





仏陀紀念館、奥に大仏像を望む

シンポジウム終盤の

パネルディスカッション

左から：高淳嘉さん（通訳）、三輪嘉六理事長、林志宏先生（ユネスコ）、劉婉珍博士、岩素芬先生（故宮博物院登録保存処処長）



報告 1

2016 亜太地区宗教遺産保存修復研討会 参加報告

2016 年 11 月 29 日～12 月 3 日、台湾国台南において、標記シンポジウムが開催されました。このたび主催者である国立台南芸術大学から、当機構理事長三輪嘉六先生が招聘され、講演を行いましたので、ここにご報告いたします。

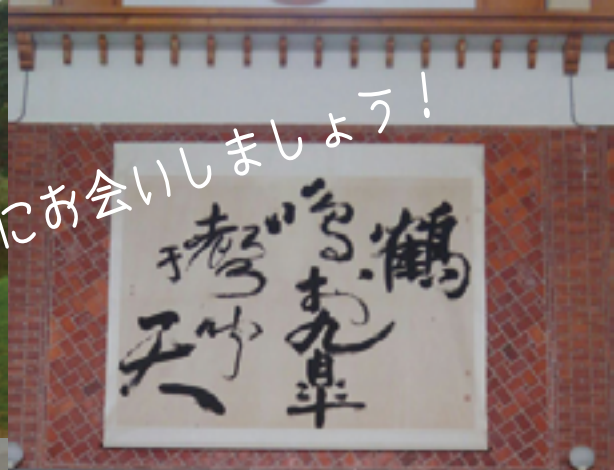
このシンポジウムは宗教遺産の保護の重要性を柱にしていることが特徴で、2008 年から台湾文化部文化資産局保存研究中心と芸術系大学の主催で毎年行われているそうです。台湾はご存知のように移民が大多数を占める多民族国家です。多元的文化を包括しながら、常に気候変動や観光開発の問題、地震や洪水などの災害にも直面しています。今回は台湾、日本、中国の文化財保存専門家、宗教家、博物館関係者、建築関係者が一同に会し、多角的視野から宗教遺産の保存方法を探る目的で行われました。

三輪理事長と本部事務局 八木は 11 月 29 日に台北に入り、高速鉄道で台南嘉義へ。車で 40 分ほど走り、国立台南芸術大学へ。その日は同大学のゲストハウスに宿泊しました。この大学は設立 20 年目とのことですが、広々としたキャンパスには

人工の池が配され、その周りには中国からわざわざ移築したという伝統的家屋が並び、情感豊かな雰囲気をかもし出していました。大学の付属施設である古物維護中心（文化財保存修復センター）を見学させていただきましたが、油彩画、装こう、紙、立体、考古遺物、染織とあらゆるジャンルが網羅され、学生が意欲的に学んでいました。

翌 30 日、いよいよメイン会場である高雄の仏陀紀念館へ。この紀念館は広大な敷地にホテル、庭園、博物館、カンファレンスルーム、レストラン、ショップ等を備えたテーマパークのような仏教施設で、約 1000 人もの僧侶がここで働いているそうです。ホテルの上に鎮座した大仏像は、台湾一の高さであるというのが地元の方の自慢です。夜になるとライトアップされる大仏は、確かに壮観な眺めでした。

(上)
国立台南藝術大学
キャンパス
(中／下)
国立台南藝術大学
古物維護研究所
油彩画修復室



国立台南藝術大学メインホールにて
左：邵慶旺先生（国立台南藝術大学
博物館学與古物維護研究所助理教授）

(右)
仏陀紀念館大仏像
(中央)
仏陀紀念館庭園の僧侶の像
(左)
『台湾宗教遺産保存修復特展』
開会式



12月1日、三輪理事長が最初に講演を行いました。タイトルは「日本の文化財保存の伝統—動産文化財を中心に—」。正倉院に象徴される伝世品が数多く残る日本ですが、近代になってから4回の文化財消失の危機がありました。講演では、その歴史を乗り越えてきた日本人の文化財に対する愛情と修理技術者たちの熱い意気込みが語られ、盛んな拍手を受けました。

三輪理事長は1999年の台湾大地震の際、文化財保存修復学会長として現地に入り、文化財のレスキューに力を尽くしました。また、JCP設立直後、大林副理事長らが建築彩色の助言のため台中の鹿港山龍山寺を訪れ、現在は文化部文化資産局保存研究中心の主任となっている李麗芳先生らと交流を深めています。そのような経緯から、今回はとても丁寧な歓迎を受けました。台湾は中国との関係から、国際政治的には微妙な立場にあ

ります。国同士の交流が難しいこともある中、民間団体が果たす役割は大きいといえましょう。JCPはこれからも台湾との交流を深め、友情を育んでいけたらと願っています。

シンポジウムは12月3日まででしたが、理事長のスケジュールの都合上、我々は2日に台湾を離れ、帰国しました。

短い時間でしたが、招聘頂いた国立台南藝術大学文学院院长 劉婉珍博士、お世話頂いた曾巧文先生、林素幸先生、邵慶旺先生、顔上晴先生に厚く御礼申し上げます。また、講演の通訳を務めて下さった国立台湾藝術大学の高淳嘉様、誠にありがとうございました。そして最後までアテンドして下さいましたスタッフのCarson、Joy、Fanny、他学生の皆さまに心より感謝いたします。

文化財保存修復専門家養成実践セミナー
に向けて

9年連続開催してきたセミナーについて

これまでとこれからを
受講生の言葉と共にお伝えします

NPOJCPは、平成20年度より、東京国立博物館保存修復課との共催により、「文化財保存修復専門家養成実践セミナー」を毎年開講してまいりました。そのきっかけは、当初さまざまなテーマで開催していた単発の月例会に予想以上の反響があり、世の中のニーズを強く感じたことにあります。文化財関連業種に就きたいと希望する若者がたくさん居るにも関わらず、実践的な学習の場が少ないという現実、また、一度専門家として社会に出ても、その後は研鑽を積む場が限られ、情報交換などをしづらいという状況、など、ニーズを産み出す要因はたくさんあります。我々はNPOとして、そうした要望に応える必要がありました。

現在、文化財保存修復専門家の研修としては、文化庁、国立博物館、独立行政法人の研究機関など主に公立機関が行っていますが、それらは対象者が限られており、民間の技術者や学生はなかなか受講の機会に恵まれません。JCPは中立的な民間の団体として、志があれば誰でも受講できる、しかしレベルは公的機関の研修に勝るとも劣らないセミナーを開きたいと考えま

した。そこで、当時東京国立博物館学芸研究部保存修復課長であった神庭信幸先生にご相談をしたところ、意欲を持った人材に広く門戸を開き、実践能力を有する優秀な保存修復専門家をもっと育てたいという想いを抱いていらっしゃる先生のご賛同を得て、東博と共催という、願ってもないご協力を頂けることになりました。これにより、このセミナーは東京国立博物館を会場とし、博物館の学芸員や東京藝術大学の教授、現役の修復技術者など一流の講師を迎えるという、最高の条件で船出することができたのです。

受講時間は年間10日間、1日2コマ（3時間／1コマ）を基本としました。カリキュラム内容を年毎にAコースとBコースに分け、両コースを履修した者が修了証書を手にするというシステムです。

加えて、平成22年度からはより実践に特化したレベルⅡを開始しました。初年度は台東区内にある古民家「市田邸」（国指定登録有形文化財）をフィールドとし、同家の床下に放置されていた古文書や、所蔵している民俗文化財を対象として応急処置を学びました。

月例会

平成 15 年	・「世界の文化遺産の保護と日本の役割」講師：西浦忠輝 ・「写真考古学－歴史写真は人類の遺産」講師：後藤和雄
平成 16 年	・「文化財のカルテを作ろう」講師：半田正博 ・「写真画像の保存」講師：高橋則英 ・「日本と台湾の文化財保存支援交流の現状」講師：林煥盛 ・「元興寺文化財研究所見学会」講師：増澤文武 ・「薄美濃を流く－文化財修復寺領としての和紙」講師：長谷川聡 ・「文化財としての人形修理」講師：新井榛名
平成 17 年	・「ディレクターが見てきた文化遺産」講師：河西 裕 ・「東本願寺御影堂修復現場見学会」講師：伊原恵司 ・「縄文土器の復元について」講師：石原道 ・「修復の世界を覗いてみよう」講師：半田正博、大林賢太郎、三浦功美子 ・「世界の至宝・アンコール遺跡群を守れ－保存修復の現状と課題」講師：友田正彦、西浦忠輝 ・「古書籍の装 装幀形態と修理」講師：吉野敏武
平成 18 年	・「タイの仏教遺跡の魅力－その保存と活用」講師：西浦忠輝 ・「文化財の虫歯害対策の段階的プログラムについて ～状況／環境に即した対策法」講師：木川りか ・「文化財の写真撮影の基本と応用」講師：野久保昌良 ・「臨床保存学のすすめ－文化財の保護と東博の使命」「東博の文化財保存修理の歩み」講師：神庭信幸
平成 19 年	・「油彩画修復の変遷 ～修復家から見た過去・現在・そしてこれから～」講師：山領まり ・「文化財と保存材料～その考え方～」講師：増田勝彦

文化財保存修復専門家養成実践セミナー

	レベルⅠ					レベルⅡ				
	実施 時期	会場	受講 者数	助成	助成額 (円)	実施 時期	会場	受講 者数	助成	助成額
平成 20 年	8/3 -8/14	東京国立博物館	30 名	(財)文化財保護・芸術 研究助成財団（以下、 文化財保護財団と表記）	1,500,000					
平成 21 年	8/3 -8/14	東京国立博物館 / 森美 術館 / 国立新美術館	22 名	芸術文化振興基金	1,000,000					
	8/31 -9/11	東京国立博物館	29 名	(財)文化財保護財団						
平成 22 年	8/30 -9/10	東京国立博物館 / 東京 藝術大学	34 名	芸術文化振興基金 / (公財)文化財保護財団	右項参照 →	11/15 -11/21	市田邸	12 名	芸術文化振興基金 / (公財)文化財保護財団	Ⅰ, Ⅱ合計 3,500,000 / 1,500,000
平成 23 年	9/1 -9/11	東京国立博物館	30 名	芸術文化振興基金 / (公財)文化財保護財団	→	10/26 -11/2	同上	7 名	芸術文化振興基金 / (公財)文化財保護財団	Ⅰ, Ⅱ合計 3,500,000 / 1,400,000
平成 24 年	8/25 -9/4	東京国立博物館 / 森美 術館 / 市田邸 他	34 名	芸術文化振興基金	3,000,000	7/30 -8/6	陸前高田市立博物館 (旧生出小学校) / 岩 手県立博物館 他	13 名	(公財)文化財保護財団 / 赤い羽根共同募金 / スト カスカリ - フェス	800,000 / 460,000 / 50,000
平成 25 年	8/19 -8/29	東京国立博物館	36 名	芸術文化振興基金	2,800,000	7/29 -8/5	同上	11 名	(公財)文化財保護財団 / 年賀郵便	1,200,000 / 1,890,000
平成 26 年	9/1 -9/11	東京国立博物館 / 小林 刷毛製作所 / 喜屋 / 市 田邸	25 名	芸術文化振興基金	3,000,000	7/28 -8/3	同上	12 名	(公財)文化財保護財団	70,000
平成 27 年	8/29 -9/8	東京国立博物館	18 名	芸術文化振興基金	2,900,000	7/27 -8/2	同上	8 名	(公財)文化財保護財団 / 企業メセナ協議会	500,000 / 400,000
平成 28 年	8/29 -9/8	東京国立博物館 / 国立 国会図書館 / 市田邸	23 名	芸術文化振興基金	3,000,000 (予定)	8/4 -8/10	東北芸術工科大学文 化財保存修復研究セ ンター / 東北歴史博 物館 / 東北大学災害 科学国際研究所他	15 名	(公財)文化財保護財団	400,000 (予定)

その後平成 23 年に東日本大震災が発生すると、大きな被害を受けた陸前高田市立博物館の支援の意味も込めて、同館仮施設である旧生出小学校を会場として、津波で被災した文化財の脱塩処置方法や危機管理について学ぶこととなりました。これは神庭先生のアイディアによるもので、「陸前高田学校」と名づけられました。陸前高田学校では、北関東、東北など地震被害にあった県内在住在勤の方の積極的な参加を促すべく、参加費を無料としました。彼らは、セミナーで得た知識や技術、情報を被災した地元を持ち帰って活かしてくれているものと思います。陸前高田学校の参加者は、津波の爪痕も生々しい現場を

実見し、また各地の被災者の経験談なども聞かせていただき、座学では得られない貴重な体験を積むことになりました。

陸前高田学校開催は 4 年間に及びましたが、もはやセミナーによって外部からもたらすことができる情報は少なくなったと判断し、平成 27 年度をもって一旦終了しました。平成 28 年度は、山形にある東北芸術工科大学文化財保存修復研究センターの全面的なご協力を頂き、同センター内で危機管理セミナーを開講させていただきました。この際は、東北歴史博物館、東北大学災害科学国際研究所にも多大なご協力を頂いています。(18 頁へ続く)

1

中村佳央

IX期生

さらなる思索を呼び起こすセミナー

我が家の近くに野ざらしの文化財があることに気づき、どうにかしたいと思っても、何をすればよいかわからず、どうにもできない。住んでいる地域に貴重な文化財があるのに、身近すぎて価値に気づかず、そのままになっている。私が遭遇したこのような事例が、多々あるのではないのでしょうか。私たちの身の回りには、道端の石碑やお地蔵さん、古い民家や神社、寺院などがたくさんあります。このような文化財を、専門家ではない私たち（＝市民）の力で保存していくには、どうすればよいのでしょうか。

文化財保存について全くの素人である私が、このような疑問を持った時にたどり着いたのが「文化財保存支援機構（JCP）」であり、このセミナーです。誰でも参加できることが大きな魅力であり、実際に受講すると、レベルⅠでは幅広い分野を、専門性の高い内容でもわかりやすく、一流の先生が熱心に教えてくださる、私にとって求めていたセミナーでした。

セミナーの多様な講義と、参加した方々との交流は、自らの経験を文化財という角度から相対化してくれました。そこから見えてきたのは、「教育と文化財」という視点です。学校で行われている社会科教育では、多くの文化財を扱います。歴史的事象を読み取る材料として用いられるので、文化財として保存していくべきもの、という視点ではほとんど取り上げません。授業を経ていくうちに、自然発生的にそのような気持ちが醸成されていけばよいですが、それは都合のよい期待でしかありません。

また、授業で取り上げる多くの文化財は、非常に有名な国宝や重要文化財、さらには世界遺産に指定されているものです。すると、「自分たちにとって手の届かいもの＝文化財」という意識を生んでいるかもしれません。もっと足元にも目を向けていく必要があるでしょう。通学路にも地域の歴史を伝える文化財があるのです。

つまり、社会科教育の中で意図的に文化財保存の視点を持つことが、地域の文化財を次の世代に伝えていこうとする「市民」の育成につながっていくのではないのでしょうか。

私は大学で歴史学を学びましたが、文化財保存という視点からの講義はありませんでした。（学芸員課程を別に履修したので、博物館学は受講していました。）史資料から歴史を明らかにする学問であるはずなのに、その史資料（つまりは文化財）は「あって当たり前」のような存在でした。さらには、活字化された史資料を扱うことが多いので、長い年月を守り継がれてきた文化財という意識ありません。

そのような風潮の中で、最近では大学における歴史学教育の中に、文化財保存という視点を取り入れるべきだという声も上がってきています。歴史学を学んでいる人材だからこそ、文化財の価値に気づき、後世に伝えていく「市民」のリーダーになりうるのです。

東博での日々は新たな学びと同時に、さらなる思索や今後のやる気呼び起こす機会となりました。人口減少社会に突入し、過疎と都市化がさらに進行する日本社会の転換期にある今、これまで不断の努力で伝えられてきた文化財が危機に瀕しています。それは災害に巻き込まれた文化財だけではなく、行政から指定を受けていない、身近な文化財にも、同様のまなざしが向けられる必要があります。日本の各地で、このような危機意識のもと、様々な取り組みが行われています。その英知を結集する場がJCPであり、さらに広めていく役割が、このセミナーであるとも思います。

私の疑問への解答は、セミナーで得た多くの学びから、地道に導き出していかななくてはなりません。心強いのは来年度からセミナーが新たな仕組みで、さらにパワーアップして開催されることです。JCPやセミナーで出会った多くの方々に支えていただきながら、身近なことから少しずつ行動していこうと考えています。

なかむら よしお

明治大学・大学院で日本古代史（特に、信仰や宗教について）を学ぶ。博士前期課程を修了後、千葉県公立中学校教諭（社会科）として採用され、現在に至る。地域に根差した神社の焼失と文化財の再発見をきっかけに、身近な文化財の保存の必要性を痛感し、市民による文化財保存と活用の可能性を探っている。JCP 一般会員



レベル1の会場である東京国立博物館平成館



基礎修理設計『漆工』



基礎修理設計『彫刻』



特別講義『文化財レスキュー』



国立国会図書館見学



東博バックヤード見学



町並み見学：市田邸



修了証授与は神庭信幸先生から



「受講生の会」を開催（詳しくは12頁から）

受講生の言葉



平成 28 年度レベルⅡ：東北芸術工科大学にて、集合写真



講義 / 実習『東洋美術の保存修復』

2

村木ちひろ

Ⅸ期生

千里の道も一歩より

空模様は残念でも、学ぼうとする意志に天候は関係はありません。

去る、8 月末日から 9 月上旬にかけて、私は東京国立博物館で行われた JCP 主催「文化財保存修復家養成実施セミナー」に参加させていただきました。

8 月上旬にも在籍校、東北芸術工科大学の「文化財の危機管理セミナー」でも学ばせていただきましたが、場所が変われば人も変わります。当然、内容も濃くなり正直講義についていけるかも心配でした。

私は山形県の東北芸術工科大学で文化財の保存修復を専門に学んでいます。将来的にもコンサバターを目指している私にとって、大学では学びきれない他現場の生の声を聴き、経験を積むのが目的でした。

危機管理セミナーでは受講生でありつつ、東北の被災資料に携わるものとして参加させていただいていました。これからまだまだ処置を行う被災資料について、皆様に知っていただけたのは大きいと思っています。

さて、養成実施セミナーは間に休日を挟んで全 10 日間日程。毎日の講義で多様な分野の先生方の授業を受けれるのは、新鮮でとても貴重で濃密な期間でした。

セミナーでは国立国会図書館にも訪ねさせていただきました。図書館の裏側と言うものは、危機管理セミナーで伺った東北歴史博物館のバックヤードとは異なり、静謐とした知識の塊と言った印象を受けました。

現状の図書館が抱えている酸性紙問題、蔵書故の修復の難しさなど活用を見据えた修復・保存の現場の考え方に、立場毎の違いをまざまざと知らされ、衝撃を受けたことは記憶に新しいです。

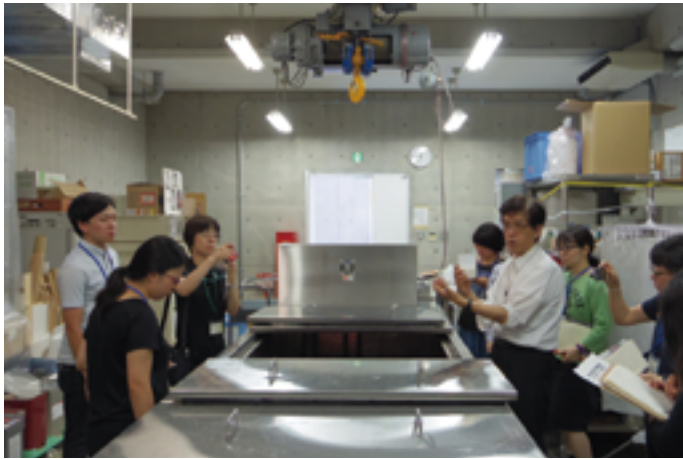
セミナーでは、日本では数少ない紙本絵画修復について学べたことが大きいと感じました。和紙の資料は数多くありますが、日本では紙本修復師の方は少なく、大学でも限られた時間でしか洋紙について学ぶことができません。海外研修は学生の身にはなかなか厳しく、洋紙も和紙もバランスよく学ぶのは難しいと思って

いたため、本当にあの時間は貴重だったと感じています。

またセミナー後も、講演会のご連絡などを頂け、貴重な人脈を築かせていただけたことに深く感謝をしております。

これからのミュージアムでは、モノを修復することよりも予防保存が中心となってくるのではないのでしょうか。神庭信幸先生の特別講義や、青木繁先生、栗田勝実先生の「環境保存概論」の講義は、修復だけでなく、作品を維持するために運搬や展示など、何にどう気を配るかを学べたと感じています。作品を保持するミュージアム毎の工夫、海外との差異や作品を借りる際の注意点など土屋裕子先生の「調査診断法」と合わせ、大変勉強になりました。

今後の自分の研究・作品処置の指針として、増澤文武先生の「調査分析法」、荒木臣紀先生の「基礎材料論」、永嶋千鳥先生の「基礎修理設計 / 金工」は是非とも活かしていこうと考えています。グループ内で出た“あったらいいな”とい



見学『東北歴史博物館』



実習 / 討論『初動時の資料レスキューと課題』於；東北大学

3

行正衣理

IX期生

レベル Ib、II を受講して

う接着剤の案は、保存科学分野に籍を置こうとする私には一つの目標にも思えました。

文化財修復分野は狭いようで広い分野です。三輪嘉六先生は講義内で人材育成の重要性について述べられていましたが、先生方が望む修復師の卵の一步をこのセミナーで進めたと感じています。

最後に、貴重な経験をさせていただいた JCP 事務局の皆様、限られた時間にも関わらず濃厚な時間を過ごさせていただいた講師の先生方、これから保存修復という分野で幾度となく顔を合わせるであろう受講生の皆様、本当にありがとうございました。

むらき ちひろ

東北芸術工科大学文化財保存修復学科
JCP 学生会員

普段は大学院で模写などを通し、文化財保存について学んでいます。そこでは絵画の修理が中心なので、他の分野の知識を広げて今の勉強に活かしたいと思い受講を決めました。

先に受講したレベル II の危機管理セミナーでは、実際に現場で被災文化財の応急処置にあたっていた先生方のお話をたくさん聞き、新しい知識を得ることができました。それまで被災文化財について勉強不足で知識が少なかったこともあり、この機会がなかったらできなかったであろう貴重な体験をすることができました。また被災した実際の文化財を見たり触れたりすることで、文化財レスキューに対する関心が非常に高まりました。

レベル I b のセミナーでは、様々な分野で文化財に関わっている先生方のお話を幅広く伺うことができました。普段私は絵画の修理を中心に勉強していますが、書跡や町並み、彫刻作品の保存やその保存環境に関する事など、色々な分野でご活躍されている先生方の講義を受

けることで知識の範囲と視野が広がったと思います。実際に作品や素材に触ったり、バックヤードや町並みを見学する授業などもあり、体験することでより深い学びにつながりました。

また、同じくセミナーを受けている受講生も様々な専門の方がいるため、意見交換や情報交換などもでき大変よい経験になる場でした。

今回のセミナーを通して、普段自分の行っている勉強だけでは補うことができない部分をしっかりと学び、強化することができたと思います。自分の専門以外の知識も満遍なくつけることができ、専門分野に対しての見方も大きく変化しました。そしてこのセミナーで学んだことや感じたことは、これから文化財保存について学び、文化財に関わっていく上で必ず役に立つものだと思感しています。

ゆきまさ えり

東京藝術大学大学院美術研究科
JCP 学生会員

平成 28 年度レベルⅡ修了生の言葉

レベルⅡは平成 22 年度からスタートしました。2 カ年のコースを受講した修了生は全体で 17 名を数えます。
平成 28 年度は 3 名の修了生が誕生しました。

4 齋藤直之 Ⅶ期生

平成 28 年度文化財保存修復専門家養成実践セミナーレベルⅡ「危機管理セミナー」に参加させていただきました。文化財保存支援機構のセミナーはレベルⅠから受講し、各セミナーが基本的な内容から実践的なレベルⅡへと組み込まれて、より具体的に理解しやすい内容でした。

「陸前高田学校」の案内を目にしたのが、セミナー受講のきっかけでした。勤務する南相馬市博物館は福島県の浜通りに位置し、東日本大震災では岩手県・宮城県同様の地震及び津波の被害に加え、東京電力福島第一原子力発電所事故に伴う放射能汚染により市内は「20km 圏内」「30km 圏内」により分断された地域で、被災文化財等のレスキューをどのように行っていけばいいのか暗中模索の状態でした。

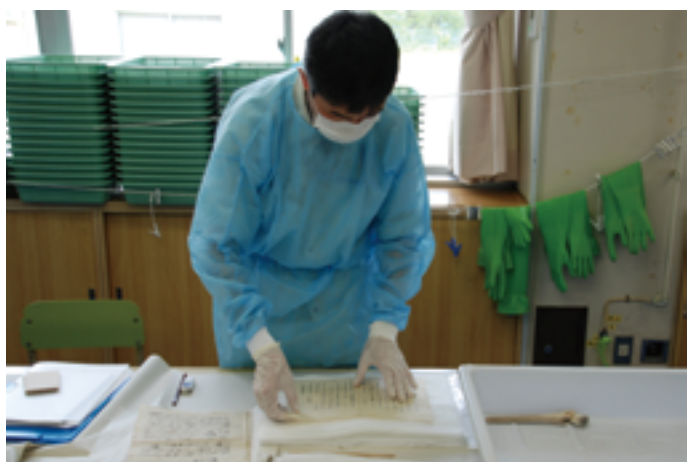
『このセミナーを受講し、文化財の保存修復に係る知識を習得し、技術を向上させ、東日本大震災および原子力災害により被災した文化財のレスキュー（現在も継続して行っている「被

災文化財レスキュー事業」）等に活かしていきたい。』を受講理由に参加させていただきました。

特に今回の危機管理セミナーは会場がこれまでの活動内容に非常に興味関心を持っていた東北芸術工科大学文化財保存修復研究センターであるということと、内容が実際に国内外で行った被災文化財救援活動の内容を特別講義で聞いた後、実習で実際に被災資料の修復現場を見学したり、資料に触れながら行うという充実した内容が、常に被災文化財と対峙している現場で速断を迫られた時の対応等、大変参考になりました。世界レベルでの被災文化財レスキューの取組み、「自分の専門外」の防災方法、「阪神淡路」「東日本大震災」から教訓を得た『情報の共有化・データの蓄積』、日常「やるべきこと」をどこまで意識できるか、ケース・バイ・ケースの「情報マネジメント」等々、約一週間最高レベルの環境と文化財保存支援機構スタッフの細やかな配慮で充実した研修を受けることができ、感謝申し上げます。

今後はこれらの研修を現場に持ち帰り、アレンジして様々な局面に活用したいと思います。

さいとう なおゆき 福島県南相馬市教育委員会
JCP 登録会員



- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤

- ①平成 27 年度「陸前高田学校」での齋藤さん
- ②平成 28 年度レベルⅡ：「西洋美術の保存修復」での齋藤さん（右端）
- ③平成 28 年度レベルⅡ：「被災資料と保存科学」の様子
- ④平成 28 年度レベルⅡ：「東洋美術の保存修復」での吉野さん
- ⑤平成 25 年度「陸前高田学校」での吉野さん



5

吉野綾子

V期生

本年度のセミナーは、東北芸術工科大学文化財保存修復センターにおいて7日間にわたって実施された。東日本大震災から5年半が経過し、その間にも茨城県常総市の水害、熊本地震が発生し、異常気象や自然災害によっていつ文化財が危機にさらされるかわからないような日々が続いている。

また、東日本大震災では福島県の原子力発電所の事故により被爆した文化財にどう対応していくべきか、考えさせられることが多かった。その背景の中で実施されたこの危機管理セミナーの講義と実習は実践的で大変意義のあるものだと考える。

研修内容は、1日目「災害と遺跡保存」講義、「東日本大震災被災文化財救援活動」講義と「保存環境」についての講義と実習。2日目「熊本城と白河小峰城跡」の講義、「彫刻の保存修復」の講義と実習。3日目は東北歴史博物館と東北大学において文化財レスキュー活動の説明と館内で収蔵されている被災資料の見学。4日目、東北大学にて被災資料の和綴じ本を一枚一枚はずし、水にくぐらせて刷毛で静かに砂や汚れをはらう作業の実習、討論。5日目「海外における修復技術者の役割」講義と「東洋美術の保存修復」実習。6日目1966年に発生したイタリアの大洪水についての講義、「西洋美術の保存修復」講義と実習、最終日の7日目は「被災資料と保存科学」講義と総合討論という内容であった。

特に興味深かった講義は文化財の放射線対策であった。震災をうけてからの対策ではあるが、このような対策等を提示できるのは世界でも数少ない。館全体の放射線対策には、各館が被害をうける前の放射線量を把握すること、事故後、しばらくの間、空調を行う際に外気を取り入れないことがあげられている。放射線量測定と除染について、測定にはGM管式サーベイメーターを用いて、表面から1センチ離れた距離でプローブを3cm/秒で移動させて表面汚染測定する。人体に使用する機材と同様のものを使用する。文化財の除染作業では、文化財に付着する放射性物質を含んだ塵埃を取り除くことが重要だという。これらの放射線対策は東京文化財研究所のホームページで公開されている。

今もなお、放射線量が非常に高いレベルにあることから足を踏み入れることの難しい地域もある。被災した文化財は修理の順番を待っている。東日本大震災から5年半が経過した。どうすべきだったのか、どうすればよかったのか、いまだ学ぶことは多い。最前線で活動されてきた先生方の意見を伺うことができたこのセミナーは、震災への対応と対策だけではなく災害の後どのように立ちあがればよいのか、たちあがることのできる強さを身につけるにはどうすべきか、限られた人数でどのようにして守っていけるのか、毎日考えながら活動する立場の者にとって、学び得たことは多かった。最後に、セミナー期間中サポートいただいたJCPスタッフの方々、会場の東北芸術工科大学関係者の方々に御礼申し上げます。

よしの あやこ JCP 一般会員



受講生の会 修了生による特別講演

平成 20 年にスタートした「文化財保存修復専門家養成実践セミナー」も、今年で 9 年目を迎え、レベルⅠ修了生は 97 名に達しました。受講生全体では 180 名にのぼり、様々な分野で活躍されています。受講生の中に築かれる人脈というのも、セミナーの大きな財産です。受講生同士の親睦を深められるような機会を設けようということで、今セミナー会期中に「受講生の会」を開催し、修了生 3 名による特別講演が行なわれました。

6

一宮（森木）佳世子

V 期生



高知県から参りました一宮です。私はもともと紙の商売からキャリアをスタートさせました。仕事のかたわら土佐和紙の産地、高知県で作り手の立場で和紙を学びましたが、和紙の可能性をもっと広げて需要を伸ばしたいと思い、使い手となる勉強もしてみようと専門学校に入学したことが文化財保存修復の道に入った始まりです。3 年間のコースを修了して、さらに学びの場がほしいと思った際に J C P のセミナーのことを知りました。その頃私は外務省外交史料館で非常勤職員をしていたのですが、私の身分では文化庁主催の講習会に参加する資格がありませんでした。ですからこのセミナーは、誰にでも門戸が開かれているという点では非常にありがたいものでした。

レベルⅠで印象に残っているのは、学校では教わらなかったお金の話をしてくださった土屋先生の講義です。博物館で油画の作品を見て損傷状態などをチェックし、グループごとに分かれて見積書を作りました。東博の現場での見積りまわりの様子や、実際に金額の入った過去の記録を惜しみなく公開して頂いたことは、本当に貴重な機会でした。現在自分で仕事を請け負う際に、このときに教わった金額の導き出し方がとても参考になっています。

レベルⅡの陸前高田学校は、1 年目 2 年目と現地の状況が変わるなか処置の方法もどんどん進化していく様子を目の当たりにすることができ、2 度にわたって参加したことに大きな意味

があったと思います。

陸前高田の保存作業の現場では高知県産の和紙や不織布が使用されている様子を見ることができました。後日、高知県立紙産業技術センターで行われた勉強会でその事例を紹介したところ、そのようなところで役に立ててもらっているとは想像もしなかったと、地元の紙業界の方々にたいへん喜んでもらうことができました。

高知に移住してから県内の紙関連施設やいの町紙の博物館に仕事で出入りするうちに段々と自分の存在も認知されるようになり、そのうちに県庁の工業振興課も県内産の紙や不織布のマーケットとして保存修復の分野に強い興味を示してくれるようになって、私もそのお手伝いをするようになりました。手始めに行ったのが昨年の図書館総合展への出展です。これまで文化財保存修復学会などでは四国の企業団体として出展し、機械漉き紙メーカーの製品が紹介されてはいましたが、県としてこの分野のイベントに関わったのは図書館総合展が初めてのことでした。おかげさまで高知県のブースは多くの人々の関心を集め、想像以上の手応えを感じた県と手すき和紙組合は続けて今年の秋も本腰を入れて参加することとなりました。

セミナーでは、いろいろな方々と素敵なお縁をいただきました



平成 27 年度「陸前高田学校」での一宮さん



た。修了後も、共に学んだ受講生からの相談に応じて紙漉きの研修や紙関連施設を巡るツアーをアレンジしたり、県内の文化施設から油彩画の修復についての相談を受けた時は、受講生を頼って先生を紹介していただいたりと、おかげさまでネットワークが格段に広がりました。

最後に、高知の紙漉きの現場が抱える深刻な問題のうち、ひとつ原料についてお話ししたいと思います。最近発展途上国で作られた作物や製品に対してフェアトレードという言葉が耳にする機会が増えましたが、遠い外国の話どころではなく、国内の山間部では、原料生産者たちがかなり深刻な「アンフェア」な状態に置かれていることをご存知でしょうか。和紙は楮・三桮・雁皮といった木の皮から作られています。特に典具帖紙や越前奉書や薄美濃などは楮の甘皮を全部削り取った白皮だけを使いますが、そこに至るまでには大変な手間がかかります。

一昨年楮の収穫のお手伝いをした際の事です。まず畑まで車で往復 2 時間、収穫作業にまる 1 日かかり、翌日は往復車で 3 時間の別の場所に赴き、楮蒸しと皮はぎ作業に 1 日費やしました。後日、その報酬として楮を黒皮の状態で 8kg あまりを約 8000 円で譲り受けました。ちなみにその金額は市場価格の半額よりも気持ち安いくらいでしょうか。その後、甘皮を削り取って白皮にする「皮へぐり」にさらに 8 日間費やし、約 4

kg の白皮ができました。それがほぼ平均市場価格の 1kg あたり 5000 円で売れたので 20000 円と、へぐったチリがプラス 1000 円の、合わせて 21000 円の収入になりました。はじめに黒皮に 8000 円を自分で支払ったので、差し引き 13,000 円が手元に残ったのですが、結局 10 日間働いたので日当にすると 1,300 円です。実際の農家の人はもっと安い値段で原料問屋さんに卸しているのですから、どうしてこれで生活が成り立っているのかというと、山で作業している方たちは年金で生活されているからなのです。

「和紙は高い」と思われているかもしれませんが、実はそういった山間部の生産者に対してアンフェアな条件で成り立っているのが現在の価格です。今日はその事実を皆さまに知ってもらいたいと思い、最後にお話しさせていただきました。

いちのみや かよこ

-- 紙作品紙資料保存修復・文化財保存修復用和紙の販売など。

-- いの町紙の博物館非常勤専門職員

神奈川県横浜市出身。生産者、販売者、消費者とすべての立場で紙を学ぶ。2013 年より高知県に移住。曾祖父は手漉き和紙職人。JCP 登録会員

7

倉田治彦

Ⅱ期生



私は2期生で、同期は35、6人いたと思います。すごく熱気のあるクラスで、今でも同窓生と連絡しあっています。

私の仕事は木工です。本日はこの桐を見てもらおうと持ってきました。これは私が10年前に自分で伐採したものです。桐の径は通常30センチほどですが、これは70センチもあります。この桐は竹林の中に生えていて、すると土壌の関係で良い桐ができます。そして10年乾かすと黒い灰汁が出ます。この灰汁は植物には必要なもので、防腐防虫効果もあるのですが、用材にしようと思うと真っ黒で使えません。私は色んな木を扱いますが、桐はこの状態にするまで、乾燥と灰汁抜きが一番難しい木です。そのため桐箱を扱っているのはほとんどが専門業者です。この桐を回しますので、色味を覚えて帰って下さい。

一番良い桐は、内地桐、国産のものです。現在日本で流通している桐のほとんどは海外産で特に中国産が多く、米国産もあります。国産は非常に高価なため、桐の収納箱はほとんどが米国産です。品質は非常に良いのですが、桐から発生する有機酸が問題となり、学会でも発表されています。そんな話を一週間前に桐材問屋の社長としました。他の材木同様、桐も海外から船に積まれて運ばれてくる時にガス燻蒸を行います。このガスが原因なののでしょうか？「今、海外産の桐は安価ですがリスクもあるので、文化財に対してはやはり国内産の桐を使いませう」と提唱されています。ただし、国産の桐も昔のように自然による乾燥や灰汁抜きはほとんどしていません。桐を本当に良い用材にしようと思えば、10年、20年かかるのです。しかし経済活動が目まぐるしい現在は時短のための人工乾燥、脱色、そして薬剤による灰汁抜きが行われます。当然それも影響しているのではないかと思います。中国桐は元々灰汁の強い桐ですので、安くて真っ白な桐箱をよく見られると思いますが、薬剤を使用しています。この10年経った桐材は色は褐色がかったいますが、材質はベストです。

もう一つ、これは私が理想としている修復の形です。護摩壇の天板の一番端で、ここに一本出ているのは車知栓です。車知栓留継ぎと言います。樺材に拭漆。修復では最良の継手です。これを抜くと、各部材全部ばらばらにできます。修復する時、材に対して最小限のケアでおさめることができます。素晴らしい技術です。最近では、継手の技術を使うところが少なく、釘を打ったり、機械で特殊なホゾを入れたりします。

さて、私は元々職人ではなく、広告代理店でカメラマンをやっていました。それから思うことがあって、スパッと仕事を辞めました。それからヒマラヤの奥地、ルンビニ、ナールンダなど仏陀の足跡を辿る旅に出ました。そこから南のスリランカ、北上してタイ、さらに行って韓国、日本と1年ちょっと見てま



平成 21 年度レベルⅠに参加の倉田さん



りました。その経験が、後の仕事に精神的な影響を与えていると思います。帰国して、「ものづくりをしたい」という気持ちがありました。金沢の蒔絵師だった叔父に輪島を薦められましたが、当時 27 歳だった私は、年齢的なことから弟子入りを断られました。仕方なく大阪へ帰ってきたところ、縁があって不動堂という会社へ入りました。木工については無知だったので、最初は苦労しました。10 年間は基本技能、次の 10 年は周辺の技能の習得です。仏壇、仏具、仏像というのは総合工芸です。工房には、木工、漆塗り、彩色、金物と色々な職人がいて、その連携が重要です。一通り分かるようになって、監督などもしていたのですが、「あれ、待てよ」となにか一つ抜けている気がして、50 歳過ぎている頃に迷っていました。

技や知識、経験は表層であり、繰り返しの勉強で身につけることができます。ところがこの真ん中はどうも希薄なんです。何かというと、理念・哲学です。何のためにこれを、どういうふうに修理していくか、その一番肝心なところをおさえていなければ、技術はあってもとんちんかんなものができあがってしまいます。

修復する仏像には、物体そのものだけでなく、その周りの信者、住職などの気持ちがあります。文化財指定されている仏像であろうとなかろうと、それは同じなので、理屈通り修復する

ことが最良ではないということについて非常に悩みました。そのため文化財保存修復学会、家具道具室内学会などに入って勉強していたのですが、ちょうどその頃に J C P で修復に関する総合的なセミナーを開催すると聞き参加しました。一つ覚えているのが、三輪先生の話で「仏像修復とか文化財の修復は 6 割でいい、次に繋がるように。」というものです。6 割というのは、手を抜くというのではなく「6 割の気持ちでやれ」ということでした。この 6 割の範囲というのをいまだに考えています。接着にしても自分が治した部分が壊れるのはいいけれど、完璧にやりすぎて肝心の当初状態のところが壊れてしまうと一番問題です。そういう具合に技術的にも精神的な面でも、もう少し黒子に徹するというか、一歩引いた状態の修復をおっしゃっていたのかなと、これをキーワードのように、いつも思い出します。

くらた はるひこ

-- 天見工房 木質文化財修復（主に仏像、仏具、家具、漆器）
伝統工芸士

1978 年まで 読売連合広告社カメラマン

1979 年はネパールヒマラヤからインド、スリランカ、タイ、
韓国の仏陀の足跡を巡礼

1980 年～ 2015 年 不動堂株式会社にて宗教用具の製作、修復に従事 JCP 登録会員

8

西願麻以

VI期生



私は山梨県立博物館というところで、保存科学の学芸員をさせていただいております。

パワーポイントの題名は「J C Pと山梨と私」です。表紙には金峰山というところから見た富士山を選びました。山梨は自然が多くて、富士山があって、ブドウや桃などもおいしくてとてもよいところです。ちょうど1年半前の4月から勤務しているのですが、山梨を大変満喫しています。

私は美術館も含めた博物館施設に行くのが大好きで、旅行とおいしいものを食べるのが好きです。経歴を紹介させていただきます。学部は高知大学理学部応用理学科で、遺伝子工学や化学分析を学んでいました。3年時に受けた博物館学の授業の先生がたまたま保存科学の先生でして、そのような分野があることを知りました。自分の専門を活かすことができますし、博物館・美術館が好きだったので、保存科学の世界に進みたいと思い、大学院は東京芸術大学大学院文化財保存学専攻の保存科学研究室に入りました。大学院の2年間でJ C PのセミナーレベルⅠのA、BとレベルⅡの陸前高田学校に参加させていただきました。学生の間を受講しないと仕事に就いたら受講できなくなると思い、めいいっぱい受講しました。運良く、大学院卒業とともに山梨県立博物館で保存科学の学芸員として採用され、現在に至ります。

セミナーに参加した理由として、それまで違う分野にいたということもあり、なるべく多くの知識を習得したかった、博物館や保存科学の学芸員さんは実際にどのようなことをしているのか・博物館の実際の現場を知りたかったということが挙げられます。陸前高田学校は、被災地で行われている活動を実際に見てみたいと参加しました。

山梨県立博物館は新宿から約2時間で、意外と東京の近くにあります。人文系博物館で、26万件もの歴史・美術・民俗・考古など幅広い分野の資料があります。開館して10年です。博物館建設段階から平川南館長が保存科学の重要性を主張され、博物館の設計、収蔵庫や展示室の設備などに保存科学の学芸員の意見が取り入れられており、資料の保存設備が充実しております。バックヤードの見学も可能ですので気軽にお声がけください。

また科学分析機器がたくさんあります。電子顕微鏡、X線撮影装置、蛍光X線分析装置などひと通りのものが揃っており、私ひとりでは持て余すくらいです。すぐ近くの山梨文化財研究所の機器と合わせると文化財の分析に必要な機器がだいたい揃います。

仕事は主に保存業務を担当しており、収蔵庫・展示室の環境整備や掃除、燻蒸を行っています。他、県内の博物館施設や社寺、



山梨県立博物館シンボル展『よみがえる、ふるさとの宝たち』

一般のお客様に資料の保存についての助言をしたり、館や県内の文化財の科学分析をしています。当館には保存の部署がなく、現在は企画交流課に配属されており、保存業務以外に、イベント対応や広報、チラシ類の発送、山梨県の博物館協会（ミュージアム甲斐ネットワーク）の事務局としての事業の遂行なども行っています。

また今年は6月4日から7月4日の期間で開催された展覧会『よみがえる、ふるさとの宝たち』の担当をしました。岩手県陸前高田市の被災文化財再生をテーマにした展覧会です。この展覧会をやるきっかけとなったのがまさに陸前高田学校です。陸前高田学校の講義で、同市立博物館の主任学芸員 熊谷賢（くまがい・まさる）先生がおっしゃっていた「文化財の残らない復興は本当の復興ではない」という言葉がずっと残っていました。同市で行われている活動を多くの人に伝えたくて展覧会を企画しまして、「大津波被災文化財保存修復技術連携プロジェクト」の一環として、展覧会や被災した資料の修復技術に関するワークショップの開催が実現しました。熊谷先生に山梨までお越し頂き、講演会やギャラリートークも開催しました。展示では、処置や修復技術についても紹介しましたが、「ふるさとの宝」にスポットをあてて、地域資料を未来へ遺す意義をもう一度見つめ直すという内容にしました。展示を見た、関東地方に移住された陸前高田や大船渡出身の方々が、子どもの時にこの資料を見た、このオルガンの音を聞いた、ここまで修



平成 26 年度「陸前高田学校」での西願さん

復してくれてありがとうと言ってくださいました。その言葉を今も処置や修復の活動を続けている陸前高田のみなさんに還元させていただきました。みなさんの活動がすばらしくて多くの方に感動を与えることができたのですが、とても良い展覧会になったと思います。

陸前高田学校を受けているときはこのような形になるとは全く思っていなかったです。人生どうなるかわかりません。みなさんも JCP で学んだことは全て活かせると思います。受講している時は、色んな分野があって自分の興味のある分野もあれば全然わからない分野もあり、メニューが多いなと思っていましたが、実際に保存科学の学芸員になると全ての分野の知識が必要となっています。JCP で多く学んだ中でも特に印象に残っていることは、東京国立博物館の理念、臨床保存の考え方です。今、現場でとても活かされており、この考え方を学べたことはとてもありがたかったです。

さいがん まい

-- 山梨県立博物館 学芸員（保存科学）

2015 年に東京藝術大学大学院 美術研究科 文化財保存学専攻を卒業。同年 4 月から現職。博物館資料の保存業務や文化財の科学分析を担当。現在は山梨県における文化財防災についての研究を進めている。JCP 登録会員

レベルⅠは年間10日、レベルⅡは年間7日、それぞれ2カ年受講で修了証書授与という形式を取ってきましたが、そろそろ開催形態を変える時期に来ていると感じます。毎回アンケートを取っていますが、・2週間という休暇が取りにくい、・遠隔地での宿泊費などが負担、・もっとひとつの分野に特化した講義を受けたい、などというご意見が多く見られました。そこで、来年度からは、2ヶ月に1度程度、2日間の集中講義という形を取り、ある分野を深めるようなカリキュラムを組みたいと考えています。例えば油彩画なら、保存修復の話は勿論として、実践で役に立つ見積もりの仕方、仕様書の書き方を学ぶなどです。まだまだ企画段階ですので、これから各方面の専門家と話し合いしつつ、カリキュラムを練っていく予定です。

文化財をいかに修復し、継承していくかは、文化と社会の関わりについて考えることです。後継者の問題、消滅しそうな材料の問題、技術をいかに評価するか、被災文化財の適切な救援方法は・・・などなど、検討を加えなけ



ればいけない課題は山積しています。JCPは、セミナーを通じてこのような課題に向き合っていく所存です。会員の皆様も、セミナーに対するご意見やご希望がございましたら、どうぞ事務局までメールにてお知らせ下さい。(jimukyoku@jcpnp.org)

このセミナーは、単なる知識や技術を修得するだけのセミナーではありません。文化財に真摯に相對する姿勢を学ぶことは、それらを産み出した社会や民族への理解が醸成されることに繋がります。文化の多様性を受け入れ、リスペクトの感情を持つことは、世界に生きるひとりの人間として普遍的に大切なことですが、実現することは往々にして難しいことです。私達は、文化財教育を通してそうした人間をひとりでも多く世に送り出し、他者を傷つけ合わない社会の実現を願っています。

どうぞこれからも、JCPが行うセミナーの行方を、暖かく見守っていただければ幸いです。

芸工展 2016 参加企画「修復のお仕事展『16 ～伝えるもの・想い～』」に出展しました。

谷中地区のお祭り「芸工展」参加企画「修復のお仕事展」は、今年も谷中の平櫛田中邸で10月9日～16日まで開催されました。今年のテーマは「しまう」。絵画・写真・埋蔵文化財・染織・陶磁器などの専門家がテーマに沿った展示を行う中、JCPは人材育成と人材活用をテーマにポスター発表しました。8日間に訪れたのは延べ587人。これも継続開催の成果でしょう。文化財保存修復の「お仕事」が、社会に広く認知されていくことを願っています。



表紙の
写真



今号の表紙写真は、平成28年度セミナーLv.2「文化財危機管理セミナー」からの一枚です。最終日の『被災資料と保存科学』の実習風景です。左の壁は東北芸術工科大学文化財保存修復研究センターの建物で、その裏手の屋外でクリーニング作業をしています。カメラを託したスタッフの平野由美子さんがたくさんの良い写真を撮影してくれました。一体どこに登ってこの写真を撮ったんだろう？夏の山形、セミナーの一コマ、様々なストーリーが皆様にも伝わりますでしょうか。

編集 後記

1年が365日もあるというのは嘘？と思うほど、時間の経過を早く感じる今日この頃です。ですが今回セミナーの歩みを整理していて、やはり9年間は長い年月であったと再認識しています。実現には様々な困難がありましたが、たくさんの人たちの助けを得て、ひとつひとつ乗り越えてきました。そして気がつけば多くの方々とのご縁ができて、JCPの今があります。最初に手を差し伸べてくださった神庭先生をはじめ東博の方々、無茶振りを受け止めてくださった講師の先生方、陸前高田市立博物館、岩手県立博物館、東北芸術工科大学をはじめとする東北の先生方、助成団体各位、後援・協力団体各位、また、熱心に受講して事務局の背中を押してくれた受講生・・・改めて支えて下さった方々に感謝すると共に、これからの展開を見守っていただきたいと思います。

謝 辞

今回ご寄稿頂いたセミナー受講生の中村様、村木様、行正様、齋藤様、吉野様、お忙しい中本当にありがとうございました。また、セミナー修了生の会に遠方からご出席いただき、ご発表いただいた一宮様、倉田様、西願様には、今回の掲載に関して再びご協力を頂きました。心より御礼申し上げます。

お陰様で今号は、20ページというボリュームをお届けできることになりました。ご協力いただいた全ての方に感謝申し上げます。

ご入会ありがとうございました。

(平成 28 年 12 月 25 日現在入会者数)

- 理 事 8 名
- 維持会員 16 名 (役員含む)
- 登録会員 163 名
- 一般会員 116 名
- 学生会員 66 名
- 監 事 1 名
- 評 議 員 1 名
- 賛助会員 27 件

株式会社 宇佐美松鶴堂
株式会社 宇佐美修徳堂
株式会社 岡墨光堂
株式会社 桂文化財修理工房
有限会社 紙資料修復工房
京都造形芸術大学 日本庭園・歴史遺産研究センター
国富株式会社 長崎営業所
株式会社 芸匠
株式会社 光影堂
一般社団法人 国宝修理装こう師連盟
修理工房 宰匠株式会社
株式会社 坂田墨珠堂
株式会社 松鶴堂
株式会社 修護
株式会社 修美
中部資材株式会社
株式会社 東都文化財保存研究所
日本通運株式会社 美術品事業部
株式会社 半田九清堂
長谷川 聡
百元 節
株式会社 フレンドトラベル
株式会社 文化財保存
合同会社 文化創造巧芸
山領絵画修復工房
他 個人 2 名 (アイウエオ順)

NPO JCP の活動に 参加してみませんか？

- 登録会員：年会費 7,000 円
文化財保存に関わる専門的技能を持ち、プロジェクト遂行に協力する個人。
登録会員は文化財の保存事業を行うための専門家で、文化財に直接関わる専門家とは限りません。
- 一般会員：年会費 5,000 円
この法人の目的に賛同し、支援する団体、個人。
- 学生会員：年会費 3,000 円
大学または大学院に相当もしくは準じる教育機関の学籍を持ち、この法人の目的に賛同して入会する個人。
- 会員特典：季刊情報誌の送付
講演会／研修会等への優先参加

※入会ご希望の方は、ファックス、電話、メールにて申込用紙をご請求ください。折り返し資料をお送りいたします。また、ホームページからでも入会申込ができます。

TEL：03-3821-3264 / FAX：03-3821-3265

E-mail：jimukyoku@jcpnpo.org / URL：www.jcpnpo.org

※現在 JCP では、東日本大震災、熊本地震その他の被災文化財救援募金を受け付けております。ご連絡頂ければ、振込料無料の振込用紙をお送りいたします。

皆様の暖かいご支援を、どうぞよろしくお願い申し上げます。

※この他にも、随時寄附を受け付けております。

下記の郵便振替、あるいは銀行口座をご利用ください。

- ・郵便振替 00120-4-10545
NPOJCP
- ・三菱東京 UFJ 銀行 四谷三丁目支店
普通預金 3960340
特定非営利活動法人 文化財保存支援機構
理事 三輪嘉六
- ・みずほ銀行 根津支店
普通預金 1727893
特定非営利活動法人 文化財保存支援機構

NPO JCP NEWS vol.32

2016 年 12 月 25 日発行



特定非営利活動法人
文化財保存支援機構

〒110-0008

台東区池之端 4-14-8 ビューハイツ池之端 102 号

TEL：03-3821-3264 FAX：03-3821-3265

E-mail：jimukyoku@jcpnpo.org

URL：www.jcpnpo.org

関西支部

京都造形芸術大学 日本庭園・歴史遺産研究センター内

TEL：075-791-8519

〈理 事〉

三輪 嘉六 (理事長)
大林 賢太郎 (副理事長・関西支部長)
西浦 忠輝 (副理事長)
沢田 正昭
本田 光子 (九州支部長)
増澤 文武
増田 勝彦
三浦 定俊

〈評議員〉

田邊 三郎助
〈本部事務局〉
八木 三香 (事務局長)
松本 洋子
〈関西支部事務局〉
伊達 仁美 (事務局長)

編集 米澤 麻由子